

政務活動費 活動実績報告書

件名	愛知県西尾市、中山峠（岐阜県中津川市、長野県南木曾町）
使途	○1 調査研究費 2 研修費 3 要請・陳情活動費
金額	8 4 5 7 4 円
期日	令和 8年 1月12日（水）～令和 8年 1月 15日（木）
場所	愛知県西尾市、中山峠（岐阜県中津川市、長野県南木曾町）
目的	<p>抹茶産業の構造と観光への展開手法、ならびに歴史資源・山間部資源を活用した歩く観光の実態を把握し、八女市におけるお茶観光および山間部観光施策の検討に資することを目的として実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産業としての抹茶の成長要因と課題 ・歴史的街道を活用した観光動線・インフラ設計 ・行政区分を越えた広域連携のあり方 <p>について、現地視察および関係者ヒアリングを通じて検証した。</p>
参加者	坂本治郎 1名
西尾市	<p>西尾市は、抹茶の原料となる碾茶の生産地として全国有数の規模を有し、単一産地としては日本最大級とされている。近年の世界的な抹茶需要の拡大により、西尾市の抹茶は国内外から注目を集めており、その背景と実態を把握することが本視察の主眼であった。</p> <p>西尾市の茶生産は、八女市のような山間部中心の地形とは異なり、河川の恵みを受けた平野部で行われている。そのため、茶園が民家と隣接し、生活空間と生産現場が近接している点が特徴的であった。広大な茶畑が連なる景観というよりも、地域の日常の中に茶づくりが溶け込んでいる印象を受けた。一方で、抹茶生産に特化した碾茶の栽培面積や加工量は非常に大きく、産業規模としての厚みを実感した。</p> <p>現地では、西尾市を代表する製茶事業者である西条園および葵製茶を訪問し、抹茶の製造工程、体験事業、流通の状況について確認を行った。西条園の抹茶ミュージアム「和く和く」では、抹茶の歴史や製造工程を体験型で学べる仕組みが整えられており、工場見学、石臼体験、試飲、物販が一体となったツアーとして運営されていた。単なる展示施設ではなく、「抹茶をどのように体験価値として伝えるか」という点が明確に設計されている点が印象的であった。</p>

	<p>製茶においては、碾茶の生産から抹茶加工までを一貫して行う体制を確認した。旅行会社やオンライン予約サイトを通じた抹茶体験が商品化されており、特にインバウンド向けには高付加価値価格で提供されている状況が見られた。現地ヒアリングでは、近年の抹茶需要の急増により、売上高が例年比で1.5～2倍程度に増加した事例がある一方、価格形成や在庫管理、品質維持に対する慎重な姿勢も強く感じられた。</p> <p>抹茶ブームについては、恩恵だけでなく課題も顕在化していることが確認された。現場の声として、最も対応に苦慮しているのは生産者や茶道関係者であり、短期的な利益を得ているのは流通段階、特に海外商人であるという指摘があった。抹茶は信頼関係を基盤とする取引であるため、急激な値上げや供給不安定は避けざるを得ず、ブームに踊らされない計画的な生産が重視されている。また、抹茶の定義や品質を理解しないまま取引される事例や、不当な転売の問題も指摘されており、産地としての信頼維持が今後の重要な課題であると感じた。</p> <p>行政の関与については、西尾市が抹茶産業に対して大規模な直接支援を行っているわけではないものの、市民向けの普及事業やイベントを通じて関与してきた経緯が確認された。一方で、事業者側からは負担感を指摘する声もあり、行政と産業の適切な距離感について考察が必要であると感じた。</p> <p>総じて、西尾市は抹茶に特化した産業集積とブランディングにおいて高い完成度を有している一方、担い手不足やブーム依存のリスクといった課題も抱えている。八女市においては、生産量や抹茶特化型の戦略では同様の展開は難しいものの、茶文化や体験価値を活かした別の方向性での発展可能性があると考えられる。</p>
中山峠	<p>中山道は江戸時代に江戸と京都を結ぶ五街道の一つとして整備され、本来は人や物が通過するための移動路であった。その一部である馬籠宿～妻籠宿間は、現在では「Samurai Road」として海外メディア等で紹介され、特に西洋圏からの観光客を中心に高い人気を博している。現地を歩く中で、単なる景観の良さではなく、歴史的背景と「実際に歩ける古道」であること自体が大きな価値となっていることを実感した。</p> <p>視察時は1月のオフシーズンであったが、それでも多くの歩行者とすれ違い、年間で約5万人が利用しているという実態を裏付ける状況であった。歩行者の多くは外国人であり、カップル、家族連れ、一人旅など多様な層が見られた。共通していたのは、都会型観光ではなく、自然や歴史に触れながら歩く体験を求めている点である。</p> <p>インフラ面では、名古屋・松本の双方から公共交通で無理なくアクセスできること、馬籠宿と妻籠宿を結ぶ路線バスが整備されており、どちらから歩き始めても戻れる動線が確保されている点が印象的であった。また、山道と車道がほぼ並行しているため、体調不良や天候悪化時に容易に離脱できる構造となっており、歩行者への配慮が行き届いていると感じた。</p> <p>安全対策としては、クマ対策のために道中に鐘が設置され、通過時に鳴らす仕組みが整えられていた。自然環境と共存しながら観光を成立させるための、現実的かつ効果的な対応であると感じた。</p>

妻籠宿は、日本で最初に重要伝統的建造物群保存地区に指定された地域であり、電柱の地中化や景観保全が徹底されている。大規模開発の影響を受けず、古民家・日本家屋が連なる原風景が高い完成度で保たれており、歴史的街道としての説得力を強く感じた。

一方で、観光構造上の課題も確認された。経済効果が宿泊、飲食、土産物に集中しやすく、観光に直接関与できない住民の関わりが限定的である点、また地域が保守的であるがゆえに新規参入や後継者確保が難しいという声も聞かれた。ただし、その結果として外資や大資本による乱開発が抑制され、景観が守られてきた側面もあり、短期的な経済合理性と長期的な地域維持のバランスが重要であると感じた。

実際に歩いた所感として、馬籠宿および妻籠宿自体の完成度は非常に高い一方、道中の自然景観そのものが他地域と比べて突出しているわけではないと感じた。むしろ、本区間の価値は「サムライが歩いた道」「江戸と京都を結ぶ街道の一部」という明確な物語性にあり、そのストーリーが体験として提示されている点に強みがあると考えられる。

この点は、八女市を含む他地域においても応用可能であり、自然景観そのものではなく、歴史や産業、人の営みをどのように物語化し、歩く体験として設計するかが重要であるという示唆を得た。